

中学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析¹⁾

—第二言語習得学習ストラテジーの改善をめざして—

張 威

清華大学外国語学部

1. はじめに

複合動詞は、日本語コミュニケーションでよく使用される述語形式であり、的確かつ緻密な事態描写には欠かせない重要な表現手段である。

現代日本語複合動詞の研究は、おおよそ 70 年代ごろから始まり、80 年代の後半にかけて徐々に注目されるようになり、90 年代以降は関係論文の量が大幅に増加し²⁾、研究の視野と方法論においても以前より大きく拡大され、前世紀末期頃から複合動詞に関する研究書と著作が相次ぎ世に送られるようになった³⁾。一方、内容的に見れば、これまでの研究は、基本的には複合動詞に対する言語学的なアプローチが圧倒的に多かった。21 世紀に入って以来、日本語教育の視点からの論考が次第に多くなりつつある、という傾向が見られた。それにもかかわらず、全体的には、依然として複合動詞の結合形式や V1 と V2 の意味関係などについての言語学的分析が中心になって、研究が展開されているのは確かである。一方、日本語教育に直結する複合動詞の研究は相変わらず進展しておらず、外国人学習者にとって日本語複合動詞の習得は依然として越えられない大きな壁であり、教材開発と教育現場の現実を見れば、複合動詞習得についての位置づけには深刻な問題が存在し、それに必要な基本的条件と環境は未だに整備されていないと言っても過言ではあるまい。更に言えば、一般の日本語教育関係者の間では、複合動詞を学習する重要性についての認識がまだ完全に成り立っていないことも伺える。そこで、一日も早くこのような現状を改善し、第二言語習得の視点から日本語複合動詞の基礎研究を強化し、複合動詞習得のストラテジーを確立していくことは、今後の日本語教育で目指す目標であり、大きな課題でもある。

最近、注目に値することに、日本語教育の分野では、上述した複合動詞習得の問題を視野に入れて体系的な基礎研究をはじめようとする動きが伺える。「2008' 清華大学・創価大学共催日本語学国際シンポジウム」⁴⁾では、「日本語教育に複合動詞をどう位置づけるべきか」をテーマにするパネルディスカッションが行われて、日本、韓国、中国大陸、台湾、香港（3ヶ国5地点）のパネリスト（6名）と国内外からの 80 余名の参加者がそのテーマについて忌憚のない意見交換を行い、活発な討論が展開された。そのおかげで、当該課題に関する日本語教育関係者と日本語研究者の認識は一段と高まるようになった。また、2009 年 2 月には、『北研学刊』第 5 号（白帝社）で「日本語複合動詞」の特集⁵⁾が刊行される運びとなった。このように、日本語教育に直結する複合動詞研究のネットワークは既に国内外で形成されつつあり、現代日本語複合動詞の研究に新たな動機付けと研究方向が持ち込まれる時代が訪れようとしているのである。

于(2009)では、日本語複合動詞習得の問題について次のような見解が示されている。

通过对日本的留学生用日语教材和国内大学日语专业本科教材的初步分析,我们发现,在现有的日语教材中,日语复合动词好像并不是教学的重点,因此,在教什么和怎么教这个问题上,似乎没有一套教材是根据某种教学意图、有目的地来安排日语复合动词的教学内容的。这个现象可能说明两个问题。一个是对复合动词教学的重要性认识不够,一个是由于缺乏研究,所以不知该如何下手。如果缺乏适用于教学的日语复合动词的研究,即便是对复合动词教学的重要性有足够的认识,也必然就会在客观上造成复合动词教学成为薄弱环节的现象。也就是说,如果我们认识到了日语复合动词教学的重要性,要想把日语复合动词的教学提到议事日程上来,就必须从日语教学这个角度,对日语复合动词进行一次有计划和认真地研究,以找到适用于教学的日语复合动词的词汇教学范围、语义解释顺序、教学进度安排等的规则。⁶⁾

また、于(2009)は、日本語教育における複合動詞の語彙教育の範囲、意味解釈、教学進度等を設定するためには一つの客観的なデータと基準がなければならず、それを明らかにすることこそ目下の重要課題である、と指摘した上で、その課題の研究には少なくとも(1)日本語複合動詞の使用状況に関する実態調査、(2)日本語教学大綱・教材シラバス・日本語能力検定試験で複合動詞に対する要求、(3)日本語複合動詞研究の現状と研究成果についてのまとめと整理、(4)中国語と日本語のVV動詞に関する比較研究、の4つが含まれている、と強調した⁷⁾。于(2009)の指摘は、問題の要害を見事に的中した卓見である。

2. 本稿の目的とその位置づけ

拙稿は、現在日本で一般に使用されている中学校国語教科書を対象とし、日本語複合動詞の使用状況に関する実態調査を行おうとするものである。そして、今回の実態調査によって、ネイティブ・スピーカーが複合動詞を習得する場合の学習方法、ネイティブ・スピーカー向けの国語教科書で複合動詞がどう導入されているのか、複合動詞に関する学習語彙およびその分布はどうなっているのか、国語教育では複合動詞という学習項目はどう位置づけられているのかなどを明らかにし、それを日本語教育で複合動詞の学習項目を確立させ、その学習ストラテジーの改善を図るために生かすことを目的とする。

既に言及したように、日本語教育に直結する複合動詞の研究を進めていくには、複合動詞使用状況に対する実態調査は避けて通ることのできない課題であり、その研究体系の中ではもっとも基礎的な研究になる。これまで、日本語教育において複合動詞の習得に関する認識と対応が立ち遅れている事態を作り出した原因を考えてみれば、その背景には様々な要素があるにしても、未だに日本語複合動詞使用状況に対する総合的な実態調査は実施されていないこと、そして、現代日本語複合動詞に関わる総合的な情報データを取り入れた、多目的に利用できるデータベースが作成されていないことが、その大きな要因であると指摘できる。筆者の研究グループは、2004年から「現代日本語複合動詞データベース」を構築するための基礎研究をスタートし、現在、国内外の複合動詞研究者との間にネットワークを作り、大型プロジェクトで研究を進めるようになっている。

その研究には、主として次のような内容が含まれている。

- ① 70年代以降中国国内で発行されている各バージョンの『日本語教学大綱』および中国国内で出版し広く使用された日本語教科書を対象にして、複合動詞の使用状況(述べ語数

と異なり語数)、使用頻度、学習上の取り扱い方などを調査する。

- ② 70年代以降に日本で出版し広く使用されている日本語教科書を対象にして、複合動詞の使用状況(述べ語数と異なり語数)、使用頻度、学習上の取り扱い方等を調査する。
- ③ 現在、日本で一般に使用されている小学校、中学校、高校の国語教科書を対象にして、複合動詞の使用状況(述べ語数と異なり語数)、使用頻度、学習上の取り扱い方などを調査する。
- ④ 中国国内それに日本で日本語学習者と日本語教員を対象にして、複合動詞の使用意識に関するアンケート調査を実施する。
- ⑤ 日本で発行された新聞、雑誌、文学作品などの出版物およびテレビ、ラジオ放送、映画、テレビドラマなどの映像・音声資料を対象にして調査し、使用率の高い複合動詞を収集する。
- ⑥ 23万語を収録する『広辞苑』第5版(岩波書店)と日本語学習者によって広く使用されている『新明解国語辞典』第5版(三省堂)を対象に、その中からすべての複合動詞の見出し語を抽出してその収録語数を調査する。
- ⑦ 以上の調査データを処理し、整理した上で、「現代日本語複合動詞データベース」を作成する。
- ⑧ 『日中対訳日本語複合動詞例解辞典』を編纂する。

従って、本稿の調査は、「現代日本語複合動詞総合データベースの構築とその研究」と題するプロジェクトの一部であり、張(2009)で実施した小学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査⁸⁾の続きとして位置づけられる。

3. 中学校国語教科書に対する実態調査

3.1 調査の対象

本稿は以下に示す3つの異なるバージョンの中学校国語教科書を対象にして、ネイティブに対する国語教育における複合動詞の実態調査を施した。調査で使用した教科書は、いずれも現在日本国内で一般に使用されているものであり、共通してバージョンごとに3冊ずつの構成なので、合計9冊となる。

- ①『伝え合う言葉』(教育出版)(3冊)平成14年度
- ②『新しい国語』(東京書籍)(3冊)平成16年度
- ③『国語』(学校図書)(3冊)平成18年度

3.2 調査の方法と内容

本稿の調査は、一冊ずつ教科書を読み通した上で、人工によって教科書に現れたすべての複合動詞おとびその用例を漏れなく抽出し、Excelを使用して複合動詞に関わる国語教育の実態を明らかにするために必要なデータを整理した上で、「日本中学校国語教科書複合動詞データベース」を作成した。

また、今回の調査は、下記の内容を中心に行われた。

- ① バージョン別に各学年の教科書で使用されている複合動詞の語例と用例を全部抜き出し、バージョン別・学年別に現れた複合動詞の述べ語数と異なり語数を調べた上で、全バー

ジョンの延べ語数と異なり語数を統計する。

- ② バージョン別に現れた複合動詞の使用頻度を調査し、バージョン別または全バージョンで最もよく使用される上位 20 語を抽出し、その分布を明らかにする。
- ③ 対象教科書で使用されている複合動詞について、前項動詞 (V1) または後項動詞 (V2) として使用される語例の比率を調査し、それぞれの上位 20 語を抽出する。
- ④ 対象教科書で使用されている複合動詞の語例を対象に、その複合型について取り調べ、各類型の複合動詞の比率を統計する。
- ⑤ 各バージョンの教科書で、それらの複合動詞はどのように教えられているかを調査する。
- ⑥ バージョン別、学年別に調査した複合動詞を一覧表にまとめて、「日本中学校複合動詞学習語彙表」を作成する。

なお、紙幅の都合上、本稿では調査結果の中の一部しか示すことができない。「日本中学校複合動詞学習語彙表」と「日本中学校国語教科書複合動詞データベース」は、別の機会で公開することとする。

3.3 複合動詞の認定基準

複合動詞については、研究者の立場と研究目的によって、解釈の仕方は必ずしも一様ではない。新美・山浦・宇津野 (1987) は、「最小二つの実質的形態素が結合して、新しい文法的機能と意味をもつ大きな単位を形成する時、そのまとまりを複合語という。また、その実質的形態素は、二つとも動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞としての文法的性質をもつものを、「複合動詞」と呼ぶ。」としている⁹⁾。この定義は簡単明瞭で、複合動詞の本質的な特徴を的確に捉えているものであるとして、本稿は、複合動詞の実態調査を実施する際、これを複合動詞を弁別するための基準とする。

そこで、複合の類型には、「読み始める」「起き上がる」のような前項 (V1) と後項 (V2) が共に動詞形態素である場合の他に、「役立つ」「傷付ける」のような V1 が名詞形態素である場合、「近づく」「近寄る」のような V1 が形容詞形態素である場合、それに「ばたつく」「ぶら下がる」のような V1 が副詞形態素である場合もある。

また、動詞形態素が前項動詞である場合、V1 と V2 の結合形式については、原則として V1 が動詞連用形を要求するが、「追っかける」「吹っ飛ばす」のような V1 も連用形の異形態として認める。

なお、V1 と V2 の間に「て」形を介しての結合も複合動詞として認める立場¹⁰⁾も見られるが、本稿は結合度と文法的機能の上で見られる違いを考慮して、「て」形を介するものと介しないものとの間に線を描いたほうが良いとして、「て」形を介しての結合を複合動詞から除外する立場を取る。従って、「しあげる」「恥じる」「飛び出る」は複合動詞として認めるが、「してあげる」「恥じている」「飛んで出る」は複合動詞として認めない、ということになる。

3.4 調査結果と分析

3.4.1 延べ語数と異なり語数

本稿は、3 つのバージョンの中学校国語教科書を一冊ずつ取り調べて、その中で反映されている複合動詞の使用状況を綿密に調査した。そして、次のことを明らかにした。

まず、バージョン別に調べた結果、複合動詞の延べ語数と異なり語数でいずれも第1位だったのは『国語』（学校図書）（1251/825）であり、第2位は『新しい国語』（東京書籍）（804/595）であり、第3位は『伝え合う言葉』（教育出版）（768/581）である。表Iと表2は、それぞれバージョン別・学年別に調査した複合動詞の延べ語数、異なり語数、ならびに二者の関係を示したものである。

〔表I〕 中学校国語教科書でバージョン別・学年別に調査した複合動詞延べ語数

教科書 学年	『国語』 (学校図書)	『新しい国語』 (東京書籍)	『伝え合う言葉』 (教育出版)
一年	515 (100%)	243 (47.18%)	251 (48.74%)
二年	354 (100%)	318 (89.83%)	268 (75.71%)
三年	382 (100%)	243 (63.61%)	249 (65.18%)
合計	1251 (100%)	804 (64.27%)	768 (61.39%)

(注：括弧の中の数値は2位と3位のバージョンの延べ語数が1位の中で占める比率を示している。)

〔表II〕 中学校国語教科書でバージョン別・学年別に調査した複合動詞異なり語数

教科書 学年	『国語』 (学校図書)	『新しい国語』 (東京書籍)	『伝え合う言葉』 (教育出版)
一年	296 (57.48%)	167 (68.72%)	184 (73.31%)
二年	266 (75.14%)	227 (71.38%)	212 (79.11%)
三年	263 (68.85%)	201 (82.72%)	185 (74.30%)
合計	825 (65.95%)	595 (74.00%)	581 (75.65%)

(注：括弧の中の数値は該当項目の異なり語数が延べ語数の中で占める比率を示している。)

表Iと表IIの数値から見れば、『国語』（学校図書）における複合動詞の使用率が最も高く、その他の2つのバージョンと比べて、延べ語数では3割を上回っており、異なり語数では約2.5割くらい多い。そして、3つのバージョンに共通して見られるのは、複合動詞の使用率が部分的には学年の上昇と逆の方向に変動していることであり、特に『国語』（学校図書）では一年の段階で複合動詞の使用率が最も高いだけでなく、その他の2つのバージョンと比べて、約5割くらい上回っている。これらの状況からすれば、中学校国語教科書における複合動詞の導入と使用は極めて任意的であり、言語習得としての合理性と計画性が著しく欠如しており、学習者への配慮は、殆ど為されていないと推測される。これはまさにネイティブ・スピーカーを対象とする国語教育の特徴と言えるかもしれない。この推測は後の「3.4.5」の調査結果からも裏づけられている。

3.4.2 複合型の分布

本稿の調査に際し、複合動詞の前項動詞と後項動詞の結合する類型については、「動詞形態素（動）＋動詞形態素（動）」、「名詞形態素（名）＋動詞形態素（動）」、「形容詞形態素（形）＋動詞形態素（動）」、「副詞形態素（副）＋動詞形態素（動）」の4種類に分けて調査を施した。その結果、各複合型の中で「動＋動」の組み合わせは最も多く、全体の約9割を占めているのに対し、「副＋動」は1語しか現れておらず、全体の僅か0.04%を占めて最も少なく、そして「名

「動+動」と「形+動」の類型は、それぞれ全体の8.04%と2.41%を占めている。

表Ⅲは、各類型の複合動詞の分布とバージョン別・全バージョンの延べ語数におけるその比率を示している。

〔表Ⅲ〕 中学校国語教科書でバージョン別に調査した複合動詞類型の分布

バージョン名	総 合	動+動	名+動	形+動	副+動
『伝え合う言葉』	768	700 (91.15%)	61 (7.94%)	7 (0.91%)	0 (0%)
『新しい国語』	804	727 (90.42%)	57 (7.09%)	20 (2.49%)	0 (0%)
『国 語』	1251	1100 (87.93%)	109 (8.71%)	41 (3.28%)	1 (0.08%)
合 計	2823	2527 (89.51%)	227 (8.04%)	68 (2.41%)	1 (0.04%)

(注：表内の数値は各項目の延べ語数を、括弧の中の数値は総合延べ語数で占める比率を示している。)

表Ⅳは、バージョン別・全バージョンにおける各複合型の異なり語数およびその比率を調査したものである。

〔表Ⅳ〕 中学校国語教科書バージョン別・学年別に調査した複合動詞類型分布の内訳

バージョン名	総 合	動+動	名+動	形+動	副+動
『伝え合う言葉』1	184(251)	169(230)	15(21)	0(0)	0(0)
『伝え合う言葉』2	212(268)	194(247)	16(19)	2(2)	0(0)
『伝え合う言葉』3	185(249)	170(223)	13(21)	2(5)	0(0)
延べ語数の内訳	768	700	61	7	0
『新しい国語』1	167(243)	153(224)	10(15)	4(4)	0(0)
『新しい国語』2	227(318)	207(285)	16(24)	4(9)	0(0)
『新しい国語』3	201(243)	182(218)	13(18)	6(7)	0(0)
延べ語数の内訳	804	727	57	20	0
『国語』1	296(515)	269(449)	25(44)	2(22)	0(0)
『国語』2	266(354)	242(318)	19(25)	4(11)	1(1)
『国語』3	263(382)	231(333)	26(40)	6(9)	0(0)
延べ語数の内訳	1251	1100	109	42	1

(注：括弧の中の数値は該当項目の延べ語数を、外の数値は異なり語数を示している。)

また、紙幅の都合上、本稿で調査データの全部を示すことは不可能であるが、参考に資するために、ここでは、3つのバージョンで調査した「動+動」以外の複合型の語例（異なり語）を抜き出して、下記に示しておく。

① 「名+動」型：(71語)

色付く、色褪せる、威張る、裏返す、裏切る、渦巻く、自惚れる、項垂れる、片付く、片付ける、角張る、嵩張る、形作る、垣間見る、気遣う、気付く、気張る、傷付く、傷付ける、際立つ、逆立てる、口走る、口籠る、口ずさむ、区切る、元気付く、腰掛かる、腰掛ける、事欠く、心掛ける、先立つ、芝居掛ける、白み掛ける、筋道立てる、背負う、旅立つ、度重なる、力付ける、手伝う、手渡す、手放す、年寄る、年取る、年老いる、縄打つ、波打つ、名付ける、仰け反る、仰け反らず、花開く、羽ばたく、万策尽きる、罅割れる、不貞腐れる、間引く、身構える、鞭打つ、目立つ、目指す、目掛ける、目覚める、芽吹く、物言う、物語る、基づく、役立つ、指差す、夢

見る、湯搔く、勇気付ける、横切る

「名＋動」型で特に使用率の高いものは、「傷つく」(延べ 38)、「指差す」(延べ 14)、「腰掛ける」(延べ 10)であった。

② 「形＋動」型：(15 語)

大き過ぎる、多過ぎる、遅過ぎる、くど過ぎる、強張る、ごった返す、近づく、近寄る、近付ける、小さ過ぎる、長引く、早過ぎる、速過ぎる、古惚ける、短過ぎる

「形＋動」型のうち、特に使用率の高いものは「近づく」(延べ 37)と「近寄る」(延べ 28)であった。

③ 「副＋動」型：(1 語)

「副＋動」型は、3 のバージョンの中で『国語』(学校図書)二年の場合のみに現れており、その上「ごった返す」の1語だけ、そして延べ1回しか使用されなかった。

この分布のあり方は、複合動詞教育では「動＋動」型は主な内容であり、「名＋動」型と「形＋動」型はその次であり、「副＋動」型は、実際には稀にしか使用されていないものである、ということを示している。

3.4.3 バージョン別・全バージョンに見られる複合動詞の使用率

本稿は、バージョン別の複合動詞使用率、全バージョンの複合動詞使用率、それに V1 と V2 として使用された動詞形態素の使用率を調査した上で、それぞれの場合の上位 20 語を抽出した。それらの語例は、日本語教育における複合動詞の基礎語彙を選定する場合の候補として参考になるものである。

次は、表 V を用いて、バージョン別に調査した複合動詞の使用率だけを示しておく。

[表 V] 中学校国語教科書で調査した複合動詞使用率上位 20 語

順位	頻度	語例	順位	頻度	語例
①	見付ける	62	⑪	睨み付ける	24
②	見詰める	54	⑫	立ち止まる	22
③	気付く	38	⑬	振り返る	21
④	近づく	37	⑭	出会う	19
⑤	出掛ける	37	⑮	飛び去る	18
⑥	作り出す	33	⑯	飛び出す	18
⑦	差し出す	33	⑰	歩き出す	17
⑧	思い出す	32	⑱	繰り返す	13
⑨	立ち上がる	29	⑲	引き取る	12
⑩	近寄る	28	⑳	引っ張る	9

3.4.4 使用頻度から見る V1 と V2 に現れる形態素のベスト 5

本稿は、調査対象の教科書から抽出したすべての複合動詞の前項要素と後項要素ならびにその使用頻度を統計した。表 VI は V1 と V2 に現れる形態素上位 5 語を示したものである。

〔表VI〕 中学校国語教科書で調査した複合動詞 V1 と V2 に現れる形態素上位 5 語

順位	V1 として	頻度	V2 として	頻度
①	見る	32	込む	73
②	引く(引き+引っ)	25	出す	72
③	取る	24	始める	54
④	言う	20	合う	40
⑤	駆け	16	付ける	38

3.4.5 中学校国語教科書に見る複合動詞の取り扱い方

これまでは、3つのバージョンの中学校国語教科書で使用されている複合動詞の様々な調査データを見てきたが、この節では、言語習得の視点から、国語教科書における複合動詞についての取り扱い方について考察してみる。

本稿はバージョン別・学年別に中学校国語教科書の中で導入された複合動詞が学習項目として規定されているかどうか、複合動詞の定義と説明が記載されているかどうかを調査した結果、次のような事実が明らかになった。『伝え合う言葉』（教育出版）と『新しい国語』（東京書籍）では、教科書の学習項目として複合動詞の概念と定義が取り上げられていないのに対して、『国語』（学校図書）の場合は、「複合動詞」の概念については明確に取り上げたわけではないが、三年の p. 266 には複合語の概念について説明があった。

表VIIは、中学校国語教科書で見られる複合動詞学習項目の取り扱い方に関する調査結果をまとめたものである。

〔表VII〕 中学校国語教科書で調査した複合動詞学習項目の取り扱い方

バージョン名	学 年	定 義	本 文	練習問題
『伝え合う言葉』	×	×	○	×
『新しい国語』	×	×	○	×
『国 語』	三年	△（注1を参照）	○	△（注2を参照）

注1：『国語』（学校図書）p. 266 には、「複合」について下記の通り定義している。

複合の定義：

このように、合成語には、①二つ以上の単純語を組み合わせで作られたものと、②単純語に接辞（接頭語・接尾語）が付いたものとの二種類があり、①を複合語、②を派生語と言う。

注2：『国語』（学校図書）p：267-269 には、下記のような練習問題が出題されている。

① 次に語のそれぞれについて、複合語か派生語かを見分け、派生語については接頭語か接尾語かを指摘しよう。

A 打ち上げ B 大空 C お巡りさん D 真顔 E 見物人 F 確かさ G お客さま

② 次の複合語のそれぞれについて、〔例〕にならって、造語成分相互の関係を説明しよう。

〔例〕水たまり—水がたまった所—〜が〜する所

A 心強い B 水遊び C どきどきする

③ 次に示す語を二つ組み合わせで複合語を作り、その構成と意味を説明してみよう。

星 道 日 秋 手

起きる 行く 流れる 晴れる 帰る 焼ける 出る 入る 早い

④ 次の複合語を、それぞれ下に示した言い方と比べて、意味の違いを説明しよう。

赤字—赤い字 軽石—軽い石

表VIIで明らかのように、3つの異なるバージョンの中学校国語教科書の中で、『伝え合う言葉』（教育出版）と『新しい国語』（東京書籍）では、複合動詞の概念を取り上げて学習項目として定義付けを施すことは何もしていないのに対して、『国語』（学校図書）の場合は、三年の段階で「複合語」という概念が提出されている。そして、複合語についての練習問題も作成されている。しかし、それは「複合動詞」に対する説明についてはまったく触れていなかった。この点からみれば、国語教育では、複合動詞の習得について基本的に自然習得に任せっぱなしになっているのである。注意を要するのは、このような対応と位置づけは、そのまま第二言語習得の日本語学習に当てはめられているようであり、そのうえ、殆どの日本語教育関係者は、長期的にこのような振る舞いについて何らの抵抗と問題意識も持たず、当たり前のことのように認識し続けてきた、ということである。

4. 終わりに

本稿では、日本中学校国語教科書を対象にして複合動詞の使用状況と学習状況を調査した。それは主としてネイティブ・スピーカーが国語として複合動詞を習得する場合のメカニズムを解明するために実施されたものであり、その調査結果は日本語教育に直結する複合動詞の研究を深め、日本語教育における複合動詞の学習ストラテジーの見直しに対して参考の価値がある。紙幅の都合上、調査したすべての項目と詳細なデータを取上げることはできなかったが、それらの情報は後日にデータ化した上で「日本中学校国語教科書複合動詞データベース」を作成し、公開することとする。

また、本稿では、中学校国語教科書の調査結果と張（2009）で実施した小学校国語教科書の調査結果との比較分析をする余裕はなかった。そして、これに続く高校国語教科書に対する複合動詞の実態調査も実施しなければならず、その後、国語教育全体に対する複合動詞実態調査について総合的なデータ解析を加えなければならないが、それは今後の課題とする。

謝辞

本稿の調査に際し、岩手大学教育学部の藤井知弘教授と県立広島大学の友定賢治教授、清華大学外国語学部の馮海鷹講師に調査対象となる国語教科書の収集で多大なご協力を頂いた。また、複合動詞の語例・用例の摘出、輸入、ならびにデータベースの作成等の作業においては、清華大学外国語学部日本語学科学部生だった程宝燕さんをはじめ、清華大学 SRT プロジェクトに参加したその他の学生たちから多大なご協力を頂いた。ここに上記の方々に対して、謹んで厚く御礼申し上げたい。

注

1) 本調査は、「現代日本語複合動詞総合データベースの構築とその研究」と題するプロジェクトの一部分である。また、張（2009）の調査では小学校国語教科書を対象にしたが、今回の調査では中学校国語教科書を対象にし、そしてこれに引き続き、高校国語教科書に対する複合動詞の実態調査を行う予定。この3つの調査で日本の国語教育における複合動詞の実態を明らかにすることを目的としている。

- 2) 于・その他 (2009) で収録された280篇の論文のうち、70年代以前は29篇、70年代には22篇、80年代には39篇、90年代には68編、2000年以降は122編となっている。
- 3) 例えば、姫野 (1999)、林 (2000)、松田 (2004)、由本 (2005) など。
- 4) 「2008' 清華大学・創価大学共催日本語学国際シンポジウム」は2008年10月11-12日北京・清華大学で開催したものであり、「動詞とその周辺」をテーマとしている。
- 5) 『北研学刊』(白帝社)は広島大学北京研究センターの学術雑誌であり、その第5期に「日本語複合動詞」をテーマにする特集を掲載し、2009年2月の出版になっている。合計20篇のうち、日本人研究者の論文は6篇(30%)、後の14編(70%)は在日中国人研究者も含む外国人研究者によって執筆されている。この特集から、日本語教育に直結する複合動詞研究に関する海外の日本語研究者の問題意識と研究の現状が伺える。
- 6) 詳しくは、于 (2009) を参照。
- 7) 原文は中国語で執筆されているが、本稿での日本語訳は筆者によるものである。
- 8) 詳しくは、張 (2009) を参照。
- 9) 新美・山浦・宇津野(1987)、p. 1。
- 10) 例えば、宮島 (1972)、姫野 (1977)、姫野 (1978)、森山 (1988)、姫野 (1999) など。

参考文献

- 宮島達夫 (1972) 『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 姫野昌子 (1978) 「複合動詞『へこむ』および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』早稲田大学語学教育研究所
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子 (1987) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ4 複合動詞』荒竹出版
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 林 翠芳 (2000) 『日本語の複合動詞の研究』中山大学出版社
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房
- 張 威 (2007) 「現代日本語複合動詞に関わるデータベースの構築とその応用研究」『東京工業大学・清華大学大学院合同プログラム社会理工学コース第2回シンポジウム論文集』東京工業大学
- 于康・佐藤暢治・佐藤利行 (2009) 「日本における複合動詞研究—主な参考文献目録—」『北研学刊』第5期、白帝社
- 于 康 (2009) 「日语复合动词的研究与日语复合动词的教学—研究方案试论—」『北研学刊』第5期、白帝社
- 張 威 (2009) 「小学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析—第二言語習得学習ストラテジーの改善をめざして—」『北研学刊』第5期、白帝社